本学蔵鉄鋏の銀象嵌について

網　干　善　教

1

関西大学考古学資料室の蔵品に一挺の鉄製鋏がある。この資料について『本山考古室要録』[1]には「三二九、鉄製鋏　一個　朝鮮慶尚北道慶州古墳、全長四寸四分　折曲式」とある。収蔵の経緯は不明であるが、慶州の古墳より出土したものとして本山考古室資料になり、その後関西大学に移されたものの１点である。

関西大学では平成４年度の資料保存処置としてこの鉄鋏を奈良県立橿原考古学研究所資料室保存科学研究室の今津節生室長に依頼することにした。その結果、研究部長の泉森皎氏より鉄製鋏に銀象嵌が施されているとの連絡をうけ、関西大学考古学等資料室主任の角田芳昭氏と橿原考古学研究所に赴き実見した。今回、保存処理が完了したのを機会にこの資料について紹介したい。

2

本鉄鋏は全長11.0cm、刃渡り5.5cm後端のバネの部分が８字形になった形式である。ただ、この鋏は現在も使用されているバネの部分がU字形になった日本鋏の構造ではなく、バネの部分がさらに折り曲げられて円形状をなした形式で握部とバネ部が分れている構造といえよう。

つぎに本資料は片方の刃の部分は完形であるが、他方は先端が欠損している。そこで説明上、完全な刃部の方をA面とし、欠損のある方をB面とする。

なお、保存処理前は全面に錆着があって象嵌を施したような痕跡はみられなかった。そこで保存処理の前にレントゲン撮影が行われ、銀象嵌のあることがわかり、最終的には研ぎ出しが行われた。

検出した銀象嵌の文様は刃部のA、B両面に施されている。文様は連続する細様の唐草文である。

A面をみると、唐草文は刃部の基部の方から先端の方向にかけて展開する。B面よりも残存状態は良くないが、B面を参考にして復原すると、まず刃に平行して直線の象嵌がある。基部に近い端は外側に折曲するであろう。残存する文様は２区劃目からである。すなわち、最初の唐草文が左にのびて、二茎に分れ、渦巻く。さらに左にのびた茎は外に向いて左から右に巻き、渦巻状になった先端が二つに分れる。

これより刃先の方は内に向って巻いた茎があり、先端の方は波形の省略された文様となる。

反対にしたB面は基部の方から先端に向かって展開する文様が施されている。最初は外側から内側に渦巻く茎があり、その先端が二つに分岐する。一方途中で分れた象嵌は波状となって先端方向に曲り、再び二茎に分岐する。

一方は先と同様渦巻き状になり、その先端は二つに分岐して終る。途中で分岐した方はさらに連続し、二つに分岐する。それより先端側はA面と同様省略された曲線の文様となる。

以上が銀象嵌唐草文の概要である。

本学、蔵銀象嵌唐草文のある鉄鋏

3

そこで鉄鋏について紹介しておきたい。

本来鋏とは片刃をもつ2枚の相対する刃部を内側で接し合わせて切断するのに用いる道具であるが、『図解日本考古学辞典』（林巳奈夫）[2]や『世界考古学辞典』(渡辺貞幸)[3]の記述によるとすでに紀元前一千年紀の後半に現在の鋏の原形が知られるという。そしてヘレニズム時代のプリエネ出土のものが最古で、後端がU字形になった形式が古いとされる。

鋏の構造には大別して後端のバネの部分がU字形になったもの、円形若しくは卵形のもの、そして8字形のものの3種類が考えられよう。

他方、通常西洋鋏と称されるものは2枚の刃が、中央の支点によって刃の部分と握りの部分に構成されるX字形がある。

中国では後端がバネになった形式のものが、漢代（前漢末あるいは後漢という説がある）から宋代までの副葬品に多くみられるといわれる。これらのバネは大部分が8字形であり、U字形のものは六朝代のものが1点あるのみとされる。（なお、西洋鋏の形式は唐代の例が最も古いとされる）

さて、本資料が目録の如く朝鮮慶州出土のものとすると、同じ慶州附近で鉄鋏の出土が知られている。慶尚南道梁山郡梁山面北亭里に所在の梁山夫婦塚である。古墳は1920年、当時の朝鮮総督府によって発掘調査が行われた。[4]東より西に降る尾根上の標高約75mの位置に築造された円墳で、外径約27m、高さ約5m、京釜高速道路から見上げても一際目立った墳丘である。

埋葬主体部は東西5.5m、南北2.3m、高さ2.6mの横穴式石室で、北側に金銅冠や銙帯金具などを着装した男性が葬られ、北側には白樺皮製の冠帽などを着装した女性の遺体が追葬されており、その他入口側には3体の合葬があった。また石室内東側には多量の土器や金属製容器、馬具などの副葬品があった。その後1990年に東亜大学校沈奉謹教授らによって再調査が行われた。[5]

この古墳での鉄鋏は女性を追葬した北側の棺の南端にあった。鋏の構造は円形のバネ部と2枚の刃部で、刃は内側に附されている。完形品ではないが構造は判明する。但し象嵌はない。

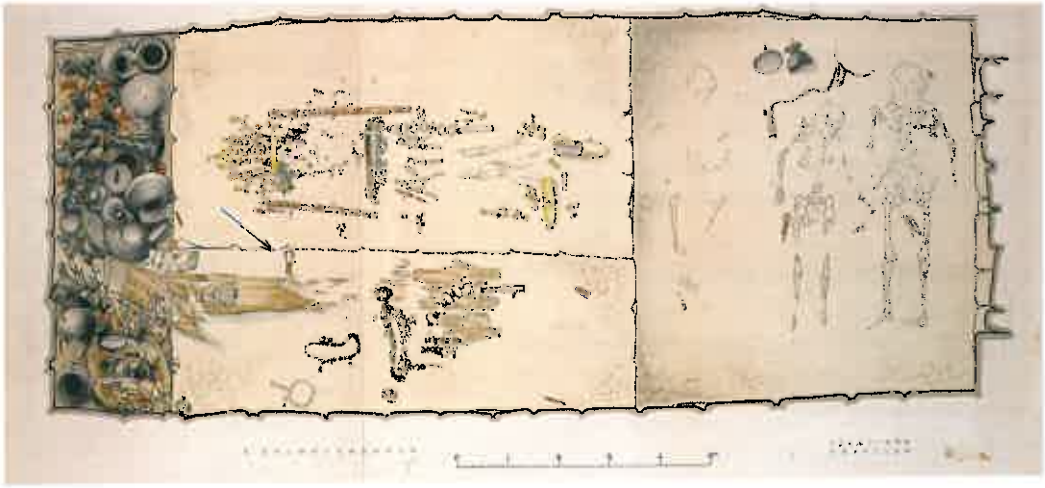
本資料について報告書には「鋏一挺、鉄製の握り鋏で、長さ四寸七分、握りの部は円るく曲げて鉄の弾力を利用し、先端は刃を両方より向ひ合せにせるもので、現今行われている握り鋏に類似するものである。」と記述している。

4

日本での鉄鋏の出土例は少なく、しかも銀象嵌を施したものはない。ところで参考のために古墳時代の類例を挙げておく。

戦前には群馬県高崎市乗附古墳や熊本県才園古墳出土のものが知られていた。

乗附古墳（旧群馬郡片岡村乗附所在）は高崎市街地から鳥川をはさんだ西南側の丘陵地帯に



梁山夫婦塚石室内鉄鋏出土位置図（報告書による）

ある6世紀から7世紀にかけての横穴式石室の群集墳の地帯である。伝高崎市乗附出土の鉄鋏は現在東京国立博物館の所蔵となっている。[6]同館目録によると、「発見年月日　未詳。受理次第　1912（明治45）年6月24日、亀田一怒より購入」の遺物であり、他に刀子、鉄鏃、鞍1対が挙げられている。このうち鉄鋏については「刃部大半を欠損。現在長14、刃身幅1.6、環部径6.8、同厚0.6。刃部僅かに遺存。柄部の遺存状態良好。」とある。掲載された写真では刃部が細く、華奢なもののように見受けられる。

次に熊本県才園古墳は球磨郡免田町才園にある。（円墳、横穴式石室）　昭和13年、公会堂建設にともなって発掘された4基のうちの1基の古墳で 石室内から画文帯四獣四獣鏡 碧玉製管玉、水晶製切子玉、ガラス製丸玉、金環、直刀、鉄鏃、鉄斧、馬具類の多量の副葬品が出土した。[7]そのなかに鉄鋏がある。古墳は5世紀末から6世紀初頭の築造と考えられている。

近時、奈良県下では桜井市穴師1067―1に所在の珠城山1号墳（前方後円墳、片袖式横穴式石室）から出土している。これについて報告書[4]では「現在使用の西洋鋏と日本鋏の折衷式といいうるものである。」とし「刃部から続くバネ部が現在の日本鋏のように刃のある方に曲げてあるのではなく、背の方に曲げて刃と刃とを対応さているもので、刃部とバネ部の接するところよりむしろ刃部の方を圧して使用する刃渡18cmバネ部の径6.5cmのものである。」とする。

もう1例は奈良県橿原市川西町高塚に所在する新沢千塚第272号墳（前方後円墳と推定）の第2主体部（組合形木棺直葬）から出土した1点がある。報告書[9]では「全長17.5cm、一本の鉄棒を折り曲げて、環状の握りと、刃部を作りだしている。握りと刃部の交点には、要めの鋲が打ち込まれている。」とする。握りの部分の断面は4.5mmの方形である。

以上の2資料は構造的には基本的に類似する。すなわち刃部は外向の同一方向につくられ、それを円形に曲げてバネ部をつくり刃を対応させ、これによって鋏としての機能をもたせるようになっている。ただ異なる点は珠城山1号墳のものはバネ部の断面は円形であるのに対して、新沢千塚272号墳のものは方形であり、握部と刃部との交点に要の鋲がある。

ここに紹介する本学蔵の鉄鋏も機能的には同じである。ただ、本資料は刃部と握部とバネ部が明確につくり分けられているということである。珠城山1号墳や新沢千塚272号墳のものは刃部を握持するようになっているが本学のものは現在も用いるU字形の日本鋏と同様握持する部分が刃部に連接してつくられている。そしてその握部の後端にバネ部がつくという構造であって先に挙げた資料より合理的、機能的に製作されているものといえよう。

5

次に本資料の特徴は、わが国ではその出土例が数例しかないバネ式の鉄鋏と管見ではあるが慶州出土に1例があるというほかA、B両面とも外側に唐草文の銀象嵌の文様が施されているということである。古墳時代の銀象嵌は刀剣や鑑鏡等においてしばしばみられるものであるが、このように鉄鋏の刃部に施された例はない。勿論その目的は装飾的意味であろうが、なかなか気のきいた表現であると思う。その文様がまた銀象嵌の手法で施した唐草文であるとするところに製作者の風流があり、優雅で格調の高いつくりであると考える。

今回の確認は希有のものであるのでここに報告する。

注①　末永雅雄編『富民協会農業博物館　本山考古室要録』　昭和10年
②　水野精一・小林行雄編『図解日本考古学辞典』　昭和34年
③　平凡社編『世界考古学辞典』　昭和54年
④　朝鮮総督府『梁山夫婦塚と其遺物』古蹟調査特別報告第五冊　昭和2年
⑤　東亜大学校博物館編『梁山金烏塚・夫婦塚』古蹟調査報告第十九冊　1991年
⑥　東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇（関東II）』　昭和58年
⑦　乙益重隆『肥後上代文化史』　昭和29年
⑧　奈良県教育委員会『珠城山古墳』　昭和31年
⑨　奈良県立橿原考古学研究所編『新沢千塚古墳』　奈良県名勝天然記念物調査報告第39冊　昭和56年